

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	新しい世界史像への問題観
Author(s)	上野, 正治
Citation	歴史研究(32): 50-58
Issue Date	1966-12-18
URL	http://hdl.handle.net/10109/8025
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

新しい世界史像への問題観

上野正治

近年、歴史学界の一部では「現代歴史学」の課題をめぐって、いろいろな論議がなされてきている。例えば吉岡昭彦氏は、日本の社会的現実がこの一〇年間において大きく変化したことによって、大塚久雄氏の研究をはじめとする西洋経済史研究は、その実践的課題にたいして正しく適合的な意義をもちながらも、その後における西洋史学の問題観ないしは問題意識は、かつて大塚氏が抱懐されたような強烈かつ明確なものではなくなつた、ことを指摘している。また井上幸治氏も、「西洋史学界とすると、ここ数年間、むしろ沈滞していることを反省せざるをえません。一〇年前までの活潑さを想うかへると、どうしてそうなつたのでしょうか。終戦後、歴史学は日本の民主化のために指導的学問であつたし、とくに日本史研究は社会病理学の役割をはたしたのでした。」⁽¹⁾という感懐をのべている。これらは歴史学一般の問題観ないしは問題意識の化石化傾向への警鐘であるとともに、今日の研究の「沈滞」とよばれる現象が、そうした中での価値の喪失にもづくものであることを示している

とも言えよう。ともあれ、これらの主張はわれわれの関心からすれば、一九六〇年以後の新しい日本の現実に見合う問題観と価値意識の定立をいかになすべきか、という提唱になつていたのである。こうした反省に関連して、ひろく経済史学とよばれる対象にとりくむ人びとは、現在その学問的実践の課題をどこに求めているのであろうか。この点について大塚氏は、最近の「南北問題」の登場にみられる世界史的な大異変は社会科学の研究に何を要求しているか、という問題提起のなかで次のように主張されている。第一に低開発諸国の経済的現実⁽²⁾は、先進諸国のそれにもとづいて構成された経済理論によつては、とうてい把握しきれるものではなく、むしろそれに本質的に抵抗を示してくること。第二に低開発諸国における国民経済Ⅱ工業化を達成するために、先進諸国における工業化過程の経験をかえりみるという点から、経済理論と比較経済史研究の協力が要請されるようになり、社会科学の視野のなかで経済史研究があらたな意義と役割を負つて現われつつある。第三には、世界史的現実の特徴は、現代世界のうちには縦の世界史が、歴史的、地理的要因による歪みをうけながら、いわば横倒しになつて現われている

ところにあるという。それ故に、例えば「封建制から資本主義への移行」問題という一時の盛行をみた研究テーマはもう古いとするような主張とは、現実の事態は逆になっているのではないだろうか、としている。したがって十分な歴史意識によって裏づけられることが前提となっているなら、大塚氏の「現在、世界史のどの段階に關して明らかにされた史実でも、いまや自主的に動きはじめている低開發諸国の事態の科学的認識のために、また、それらの国々が国内における阻止的諸条件を除去しうるための指針として、役立ちえないものはないであろう。……」という提言こそ、われわれの問題觀の再建のために最初に検討されなければならないと考える。

私はすでにこうした問題状況のもとで、大塚氏らの比較經濟史研究の發展のうちから今後⁽³⁾に検討されるべき二つの点を指摘してみた。第一は大塚理論の「中産的生産者層」論を現代における反独占運動との関連において、新しい集團の主体の論理にまですすめねばならないこと。第二には「發展段階論」を「理念型」的構成として再把握して提出された「辺境移動」論の深化である。これは辺境が先進地域から、その地で新しく發達した生産にかんする諸遺産をうけつぎ、古い生産關係で阻害されている先進地域に先立って、順調に新しい生産様式を發展させる、という大塚氏の世界史的立場からする發展段階図式に関する新しい解釈である。

以下では第二の「辺境移動」(または辺境革命)論をとりあげ、その内容の紹介(第二節)、同理論深化のために加わるべき視点(第三節)、および若干の問題点の指摘(第四節)を、先学の諸研究成果をも考慮に入れながら明らかにしていきたい。

(1) 吉岡昭彦「日本における西洋史研究について」(『歴史評論』一二二号、昭三五)、井上幸治「西洋史的風土の反省——近代の再検討」(同、一六四号、昭三九)など。なお最近における『西洋史学入門』(前川貞次郎編、ミネルヴァ書房、昭四〇)や、『經濟史学入門』(井上幸治、交友好倫編、広文社、昭四一)などの刊行は、それぞれ『入門』と銘うって戦後研究の成果と課題を明らかにしているが、一方ではこうした混迷状況からの脱却をこころみる一つの基礎的作業であるといえよう。

(2) 大塚久雄「予見のための世界史」(『展望』昭三九、一二月号)、ほかに同「近代化と産業化の歴史的関連について——とくに比較經濟史の視点から——」(『經濟学論集』三三卷一、昭四一)を参照。

(3) 拙稿「大塚史学と批判の系譜」(拙編著『大塚久雄著作ノート』昭四〇、図書新聞社、所収)九一頁。

(4) 大塚氏は戦前の研究『近代歐洲經濟史序説』(昭一九刊)におけるイギリス農村工業の分析で、この辺境理論を具體的歴史的研究所として展開している。また、それなりの関心をもって読むならば、増田四郎氏のガリア史研究(例えば「フランク時代における都市および農村の変容」、『經濟学研究』六、昭三七)や、米川伸一氏のイギリス封建社会の研究——これについては第二節で関説——は、明らかに經濟的⁽⁴⁾下部構造の差異や「地帯構造」の差異の問題を含んでおり、われわれの課題にとっても示唆深いものがある。

二

「辺境移動」論について、ひとは次のような歴史的事実をあげる
 ことができよう。すなわち、西ヨーロッパ世界の「辺境」であった
 帝政ロシア・旧中国・キューバなどにおいて「虐げられた社会層」
 と、その「救済」追求とを方向づけた「革命的インテリゲンツィ
 ア」とによって、自生的に社会主義革命が達成されたことを。本稿
 ではこの事実を凝視することから生まれる問題関心にしたがって
 「境辺移動」論とその意義が解明されることになる。⁽¹⁾そのため
 われわれがまず検討しなければならないのは、わが国における大塚久
 雄氏の諸業績である。

大塚氏はマルクスの発展段階論を、経済発展にかんする理念的の
 構成として、ウェーバー的に再把握しつつ、段階の切れ目・移行期
 に「境辺移動」を考えるというユニークな統合の方向を打出してい
 る。同氏はすでに戦前の近世ヨーロッパ経済史研究において、「経
 済的繁栄の北漸」、毛織物生産の担い手である南ネーデルランド手
 工業者の亡命、散住、接木の現象などに注目し、近代資本主義が自
 生的に形成されたイギリスについては、中世都市のギルド制度と独
 占の桎梏から逃れた小親方層 *small masters* が、より自由な農村に
 移住、定住すること *urban exodus* を明らかにされた。かれら小親
 方層はそこで独立自営農民層と結合しつつ、「都市の織元」に対抗
 する「農村の織元」として成長をとげ、やがてそのなから近代資
 本主義の基本要因たる産業資本とその経営体としてのマニユファク
 チュアが生みおとされてくる、という一種の境辺移動を克明に実証
 されている。こうした見解は近時さらに深化、一般化されて、次の
 ように展開されている。(1)アジア的生産様式から古代奴隸制的生産
 様式への移行においては、オリエントから地中海周辺地域への中心

の移動を、(2)奴隸制から封建制への移行に関しては、ローマ帝国の
 辺境であるライン河下流地方および北フランスへの移動を、(3)封建
 制から資本主義への移行については、「西ヨーロッパの封建社会と
 してはむしろ辺境地方に属するイングランド、そのうちでもさらに
 辺境の西北の農村地帯」への移動を指摘しつつ、次のような一般
 的定式に到達している。「要するに、或る時代の社会構成の内部でそ
 の生産諸力の遺産をゆたかにうけついで辺境ないし隣接地域が、つ
 ねに次の時代の社会構成をささえる中心地域として現われているの
 であって、こうした生産諸力の継承関係において、一列の経済発
 展を貫申する歴史的連続性のみとめられる」と。そのさい大塚氏
 は、さらに進んで「資本主義から社会主義への移行のばあいにも、
 すでに同様な生産力的遺産の継承の事実が現われている」と示唆し
 ているのである。

「境辺移動」の過程を右のように定式化したのち、大塚氏は移動
 の理由を次のように説明している。「或る社会構成内部の中心地域
 では、次の段階を特徴づけるような新しい生産関係がたしかにいち
 早く生み出されるけれども、他面において、そこでは古い生産関係
 の基盤が何としても根づいたために、そうした新しい生産様式の展
 開は当然に阻害され、或いは歪曲されるほかはない。その結果、新
 しい生産様式はおのずからそうした中心地域を去って、旧来の生産
 諸関係の形成が比較的弱かったか、或いは殆んど見られなかったよ
 うな辺境ないし隣接の地域に移動(または伝播)し、そこでかえっ
 て順調かつ正常な成長をとげることになる」と。そしてこの場合、
 数ある辺境や隣接地域のうちでも、とくにある特定の地域に向って
 生産諸力の移動がおこなわれるのは何故か、という問題に関して

は、「新しい生産関係の展開を阻止するような古い生産諸関係の形成が微弱であるか、あるいは欠如しているということと並んで——問題を経済史の側面にのみ限るとしても——新しい生産諸力の発展を支えるような地理的条件にめぐまれているということもまた、もちろん重要視されなければならない」として、マックス・ウェーバー『古代農業事情』第七章「ローマ帝政時代における発展の諸基礎」の参照を求めている。その指定箇所を参照してみると、ウェーバーはそこで古代と中世をさまざまな観点から比較し、その相違のことも重要な要因の一つを、温暖な地中海沿岸から寒冷な北方内陸への「地理的舞台の転移」に求めている。すなわち寒冷な北方内陸地方では、労働力の再生産費が高くつくこと、森林の開墾や不利な自然的条件のもとにおける耕作のため、質的に高度な労働力が要求されることなどから、奴隷労働の利用は、不利益不可能とならざるをえない。そのため「内陸文化がたかまるにつれて奴隷制は……後退し」、それにかわって「自由な」農民階層に対する領主の貢納取関係が成立する。そしてこの「自由な」農民階層は、都市の工業生産物に対して、奴隷よりはるかに安定した、またはるかに購買力の大きい顧客層をなし、「計算可能な商品市場」を形成する。一方、農民階層も、近隣の都市を、その農産物の市場とすることができようになる。ともあれ、北方内陸という地理的、気候的要因が封建制の成立をうながし、両者によって「工業生産物に対する大衆購買力」が高まり、それが要因となってその「内陸工業都市」に、古代沿岸都市からその全生産力の遺産の移動をもたらす、ということになるのである。

ウェーバーの当該個所の説明をこのように解釈してよいとするは

「移動」を受け入れる「辺境」の特殊性は大塚氏の体系のなかに包摂された上で、次のように要約することができる。局地的市場圏をともなう内陸工業都市が成立し、その工業が古代都市の生産力の遺産をことごとく吸収し、さらに発展させつゝ、「自由な労働の組織化」を槓桿として近代資本主義を生み出すことになる、と。

(1) 現代における学問の進歩が実践的専門化をもたせて現われてくる場合、時代の深い要請に根ざす問題提起が背景にあるとすれば、その問題を提起するものは一体になのか、という価値判断の問題がおこってくる。私は、科学はまさにそのところで留まらなければならないと考える——つまり問題を時代そのものから受けとらなければならない——が、そして同じくそこから、科学を越える問題、すなわち思想とよばれるものが表出されてくるとおもう「科学と思想の峻別!!」。

(2) 大塚久雄『近代欧洲経済史序説』改訂版、上ノ一(昭二六、弘文堂)、六九注(2)・八二―五頁、上ノ二(昭二七、同)二八一―四〇四頁。同『近代資本主義の系譜』増訂版、上(昭二六・弘文堂)一三六・一六〇・一八六―七頁。同『欧洲経済史』(昭三一、弘文堂)、一一四・一一九・一三〇・一四六―七頁 参照。

(3) 大塚久雄「緒言」(『西洋経済史』1・昭三五、岩波書店所収)一五一―六頁。ほかに前掲同『欧洲経済史』一一・一五頁。同『共同体の基礎理論』(昭三〇、岩波書店)六四・六七注(2)・八五頁。

(4) 大塚「緒言」一六頁。なおイギリス封建制研究についてこのような問題関心を含むものとしては、米川伸一「中世イギリスに

おける『農村市場』の成立」(『社会経済史学』二二巻三号、昭三二)・同「二・三世紀イギリスの土地保有と土地市場」(『西洋史研究』4、昭三三)があり、吉岡昭彦「封建的分解と領主制」(『商学論集』二八巻二号、昭三四)はそれへの批判をもつてみよ。また G. C. Homans, *The Rural Sociology of Medieval England, Past & Present*, No. 4, 1953, pp. 32-43. および住谷一彦「ゲルマン的共同体の家族構造」(村落社会研究会編『村落共同体の構造分析』(昭三二、新潮社所収)。

(5) 大塚「緒言」一六頁。この段階にかなするより詳細な展望としては、大塚久雄「内と外との倫理的構造」(『講座 現代倫理』第五巻、昭三三、筑摩書房所収)三四一九頁。のち同『宗教改革と近代社会』三訂版(昭三六、みすず書房)に再録(一八一—八頁)。

(6) 大塚「緒言」一七頁。なおこれら「移動」の過程は、発展段階の跳び越えという観点を含んでの叙述となっており、世界史的現実をみると、この発展段階の跳び越えの観点はきわめて有効性をもつのであるが、一層の具体的展開が期待される。

(7) 大塚「緒言」一九頁注⁽²⁾。M. Weber, *Agrarverhältnisse im Altertum*, in: *Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 1924, S. 266, 270. 渡辺金一「弓削 達訳、マックス・ウェーバー『古代社会経済史』昭三四、東洋経済新報社、四八三・四八九・四九〇頁。

(8) M. Weber, a. a. O., S. 256, 263, 266, 269. 前掲『古代社会経済史』、四六三・四七六—七・四八二—三・四八九頁。なお高橋幸一郎「封建社会の経済的特質」(岩間徹編『変革期の社会』

昭三七、御茶の水書房所収)三九—四四頁。折原浩「マックス・ウェーバーと境界革命の理論」(『社会学評論』六二号、昭四〇)参照。

三

前節にみるように「辺境移動」の結果、従前の社会構成体は新しい社会構成体へと推転することになるが、この定式化が現段階においてもつ意味は、実践的思想的主体性の観点からみればすこぶる大きいと言わねばならない。とくに新しい社会構成体の文化内容は一體になのかを問おうとするとき、「辺境移動」論が実践的にも学問的にも歴史的形成力を決定的にもちうるためには、文化内容のさらに立ち入った方向づけが必要になってくる。この点でわれわれが学ぶべき対象は、M・ウェーバーの社会学とくにかれの宗教社会学である。いまなお、単に「唯物論的観点」であるとか、「原則」や「原理」であるとか、あるいは「基本的には」とか「本質的には」という言葉をもって満足する人びとが少なくないとするれば、なお更である。しかし理念的動機、倫理的動機が社会的実践にとって、あるいは歴史の一大転換期において、どれほど重要な役割をはたすかということを十分に意識しているものにとつては、⁽¹⁾法則的・物質的・自然的過程と人間の精神活動とがいかに関係しているか、その内的構造いかんという問題関心をもちざるをえない。その場合にウェーバーの社会学は多くの示唆を与えるのである。

ウェーバーは『古代ユダヤ教』のなかの「イスラエル知識層と隣接の諸文化」と題する一節において、古代パレスチナの地におけるヤハウェ宗教の成立を隣接の諸文化との関係において考察し、さら

にそれによって他の宗教改革的新形成をも説明する可能性を示唆している。ウェーバーによれば人間が新しい宗教思想を創造しうるためには、自分自身の問いをもって世界の出来ごとに対局することができなければならない、としている。しかし、「文化に飽和している Kulturgebiet」地域のただなかに生活し、その文化の技術にまきこまれている人間は、ちやうどたとえば、毎日電車で通学することに慣れっこになっている子供が、いったいどうして電車が走りはじめることができるのか、というような問いにみずから思いつくことが現実にはほとんどないであろうように、周辺世界 (Umwelt) に対してかような問いを提出することはないのである。したがって「あらゆる合理的文化のそれぞれを中心地点においては、いまだかつて完全に新しい宗教思想の成立したためしはほとんどなかった」。これに反して、そのような大文化中心地から遠くはなれた「辺境」に生活している人間が、その文化の影響にさらされ、心を動かされるばあいには、それに驚嘆し、その意味を問うチャンスが与えられる。それ故、もろもろの宗教改革的新形成がまず最初にはらまれたのは、「パピロン、アテナイ、アレクサンドリア、ローマにあらざり、ロンドン、ケルン、ハンブルク、ウィーンにもあらずして、むしろ捕囚期前のエルサレムにおいて、後期ユダヤ時代の属州アフリカにおいて、アッシジにおいて、ウィツテンベルク、チューリッヒ、ジュネーブにおいてであり、そしてフリースランドやニュー・イングランドのごとき、オランダ、北部ドイツやイギリスの文化地帯の周辺地域 *Ausengebiet der Kulturzonen* においてである」。

さらに「辺境」における文化創造にかんするウェーバーの所説を説明するためには、もう一個所重要なところを引用しておかなければ

ならない。「およそ文化の受容という現象がまったく新しい、しかも独得なる文化形成体を創造するのは、いったいどのようなばあいであるかといえ、それは、一般的にいえば、つぎのようなばあいにこそ生ずるのだ。すなわちそれじしんとしていまだ純化されておらず、また祭司的、官職的、もしくは文学的の刻印によっても固定化されていない一連の表象 *Vorstellung* があるとき、その文化受容の現象がこの一連の表象と融合すべき機会となり、また融合することを強制されたばあいこそそれである。つまりそのような文化受容の現象によって、古い合理化された形成体が、まったく新しいしかも比較的単純な諸条件に適合するように強制されるようならばいこそ、そのような文化の新創造は生起するのである」(3)。ここで注目すべきことは、ウェーバーが、古代パレスチナにおける文化革新を、その獨一性において解明するばかりでなく、右のように、文化革新の一般法則 *nomologische Wissen* ともしうべきものにまで高めて考えていることである。

さて以上に表現されている「辺境」における文化受容→創造にかんするウェーバーの所説は、次のように要約することができよう。すなわち祭司や官吏や文人によっていったん文化が刻印されると、それがまさに合理的であり、その威光が絶大であるが故に、その文化のなかで育てられた人間は、その文化を自明のこととして受け入れるのになれて、みずから事象に驚嘆し、その意味を問うという能力を喪失してしまう。それに対してそのような大文化中心地の「辺境」、とくに異質な二つ以上の大文化中心地の狭間——例えば古代パレスチナのばあい——で、それら文化形象が受け入れられ、その住民が外から入ってきた文化に圧倒されつくしてしまわない場合に

は、そこでの「文化接触」Kulturberührungによって、それぞれの文化形象が自明性を相殺しあい、そこに文化と人間とのあいだに裂目が生じ、文化にたいする人間の距離ができ、そこから意味への問いが生ずるのである。そして、そこに展開する Intellektualismus——これは、現世の組立てが全体としてなんらかの意味のある「秩序界」Kosmosであり、またそうなりうるし、なるべきであるという要求、あるいは現世を意味ある秩序界として把握したいという自然的、合理的欲求にもとずいて、体系的な世界像 Weltbild を形成する内的活動、を意味する——が、その住民の歴史的生活のなかで定着した比較的単純な表象を立脚点として、移入された文化形成の実体性を剝奪し、それを素材化し、自分たちの表象に適合的に再構成する場合こそ、新しい世界像の形成がなされるのだというのである。⁽⁴⁾

(1) ウェーバーの社会学という場合、この社会学という語は狭い意味のそれではなく、社会科学の基礎理論を意味していると言うことができる。そしてウェーバーの社会学において、思想と経済がどのように関連させられているかを取扱っているのが宗教社会学の学問分野であるということになる。さらに、ウェーバー社会学の方法論の前面に押し出されている「文化人の理念」を問題にするさい、そうした理念を生み出し、またその担い手となるような人間は歴史上どのようにして形成されてきたのか、これこそが彼の宗教社会学の中心的な課題であり、研究対象であった。大塚久雄「社会科学の方法」(一)六(昭三九一四〇、『図書』一八二、一八四—一八号)、同『ウェーバー社会学における思想と経

濟』昭四一、みすず書房)など参照。

(2) M. Weber, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. III 4. Aufl., 1947, S. 220-1. 内田芳明訳『古代ユダヤ教』I (昭三七、みすず書房)三二七—二八頁。

(3) M. Weber, a. a. O., S. 136. 内田訳『古代ユダヤ教』I、二〇四—二〇五頁。

(4) 内田芳明「文化比較の諸観点と諸問題(続)」(『思想』四九九号、昭四一)一三一頁以下、折原浩「Intellektualismus と Rationalisierung」(大塚久雄編『マックス・ウェーバー研究』昭四〇、東大出版会所収)二四六—二七頁 表象(思想)の適合化をはかる場合、そのことをなしうる独自の自主的な知識層の存在が考えられるが、それは世界を「意味」問題 Sinn-problem として把握する者のことであり、具体的には狭義の知識人ばかりでなく、祭司、官僚、貴族、小市民、「パリアア民族」、プロレタリア的諸社会層、さらには予言者までも含んでいる。前掲折原論文、二四六、二五七—二八頁参照。そしてこれら知識諸階層 Intellektuelenschichten によって打ち出された世界像は、「きわめてしばしば転轍手 Weichensteller として軌道を決定し、その軌道の上を、利害のダイナミズムが人間の行為を推し進めてきた」のである。M. Weber, a. a. O. Bd. I, S. 252. 大塚久雄、生松敬三訳『世界宗教の経済倫理—序論(2)—』(『みすず』一〇月号、昭三九)二六頁。

四

前節の引用においてウェーバーが指摘している諸事例について、

理念の革新の経過を個別的に検討し、「辺境性」の意義を明らかにすることは、それ自体で大きな研究テーマであるが、ここでは別の方向に、歴史のアナロジーを進めていきたい。他ならぬウェーバーの時代（一八六四—一九二〇）においては、西ヨーロッパ列強の全体が、合理的文化に「飽和」した大文化中心地になっていたのではなかったか、ということについてである。彼の論理をこの局面に展開してくるとすれば、「意味」への問いと理念の革新のチャンスは、今度はその大文化中心に対する「辺境」地域—すなわち列強の帝国主義的侵略にさらされている植民地や従属国に移動せざるをえないことになる。ここでは、この問題の具体的検討のために前提となってくる若干の指摘をおこなってみよう。

(1) マルクスの周知の発展段階説が、その論理の発生地盤と構成素材を、第二節においてみたようにオリエントから西へと向った一連の「世界史」的継起的発展を前提として作りあげることができた概念構成であったこと、したがって、その適用ものそ一連の領域においてまずおこなわれなければならないことになる。マルクス主義のその後の発展は、レーニンの理論を経て、世界史における個別的諸契機が重要性をもつにいたり、いわゆる「不均等発展」という概念において表現されるにいたっている。⁽²⁾それは一国内での諸生産間の発展の不均等という場合ばかりでなく、諸国間において資本主義は不可避免的に不均等発展を条件としかつ促進する、としてマルクスの理論を進展させている。大塚久雄氏がこの不均等発展の概念を、マルクスの発展段階図式にまで溯って適用し、世界史の概念によって補いつつ解釈されたことは注目すべき貢献である。⁽³⁾しかしそこで使用されている概念は、本稿の論述からみると、次のような点が

不鮮明なままに残されている。すなわち「不均等発展」ということは、(一)特定の勝利を占めた新しい生産様式が他の地域や他の文化領域に浸透し、これに支配を及ぼしていく過程にもちいられるのか。

(二)文化の(生産様式の)後進地帯を中心にそこから見て多様な個性的發展可能性、とくに次の新しい生産様式への変革可能性を認識するためにもちいられるのか、などの点である。にもかかわらずマルクスの発展法則の図式に対してマルクス主義が、その典型的發展からばかりでなく、その歴史的個別的諸様相からも問題とせざるをえなくなつた、という点で注目すべき理論發展である。⁽⁴⁾

(2) 大塚氏は『共同体の基礎理論』の研究から一歩進めて、「内」と外との倫理的構造」では次のように主張されている。⁽⁵⁾前近代社会のいづこにもみられる「共同体」を止揚する仕方に、ウェーバーが分析したような近代ヨーロッパの個人主義的市民社会の形成にモデルを発見しようとする道と、マルクスにみられる社会化 *Sozialisierung* への道と二つを提示し、共同体に固有な二重性の究極的止揚の道は、「世界史の現段階」においては後者、すなわち「機械化を基盤とする協業として(の)「社会化」の道がより重要であるという。すなわち「共同体」*Gemeinde*の新しい「共同体」*Gemeinschaft*への改造こそが、現段階における実践的思想的主体性を意味するものとして示している。しかし、大塚氏がこれまで共同体二元主義の止揚の一つの歴史の範例として示された前者の道、すなわち等価価値法則の貫徹のための論理的起動力として作用した、プロテスタンティズムのエーロースの立場(近代化への道)と、この後者の社会化の道とが、氏の方法論のなかで、具体的にどのようにつながされるのか、という問題が残されている。もちろん単純にウェーバーからマ

ルクスへの転位をおこなっているなどということではなく、むしろマルクスの社会化の道を前面に押し出されたところに氏の理論の深化の跡がみられるのである。しかし、その主張を受ける側からすれば、この二つの道が理論的に一つに統一化されるのであれば、一種の混乱を感ずるのも当然ではないだろうか。これと関連して、大塚氏が共同体から新しい共同態への改造を言われるとき、その新しい共同態の文化内容はいったい何なのか、という問題がある。氏の主張が実践的にも学問的にも歴史的形威力をもちうるためには、周知として前提されている内容のさらに立ち入った方向づけが重要になってくる。ただ大塚氏の場合、ウェーバーとマルクスにおける媒介を「人間の問題」としてクロスさせながら、一面において共通し、一面において鋭く対立するこの二つの巨大な思想体系を一つの第三のものにまで総合していこうとする旺盛な意欲と方法を、すでに幾たびも暗示されているのである。そこに新しい人間像、世界像の中核を歴史的現実との関連のなかで展開していく可能性が期待されるのである。

- (1) 水田洋氏の最近の社会思想史的研究をみよ。例えば同『現代とマルクス主義』（昭四一、新評論）など。
- (2) レーニン『帝国主義論』（宇高基輔訳、岩波文庫）、とくに第四・七章。
- (3) 大塚「緒言」、なお前掲同『欧洲経済史』第二章参照。
- (4) 世界的現実はずでに基本法則だけでは問題が処理できない局面に移行していることを示しているが、ここからマルクスの理論をウェーバーのそれと「接合」させたりすることの積極的な

理由も生じてくる。前掲内田「文化比較の諸観点と諸論点(統)」一三〇頁。ウェーバーと大塚的な立場からするマルクスとの連関性については、前掲大塚「社会科学の方法―ウェーバーとマルクス―」を参照。

(5) 前掲大塚「内と外との倫理的構造」一八一頁以下。

(6) いわゆる「大塚史学」の体系のなかで、「マルクスとウェーバー」に対する重心の移動を考えることは、その理論展開の跡を知るために重要な作業であることはもちろんだが、同時に日本の近代思想史研究の一基柢をなしていく問題でもある。

(7) このことは経済史学だけの問題ではなく、一つの大規模なかつ切実な文化問題なのであり、むしろ他の文化諸方面についても言われなければならない性質のものである。またそれは全体の思想的協働作業のなかで次第に創造されていかなければならないこととがらであらう。

(8) 大塚久雄「マルクス経済学における人間の問題」（川島武宜編『人間と社会』中山書店、昭三一、所収）同「思想史方法論 社会科学的方法」（金子武蔵、大塚久雄編『講座近代思想史』昭三三、弘文堂、第一巻所収）。同「思想史と経済史の接点―ボルケナウに対するグロスマンの批判に関連して―」（『みすず』一月号、昭三五）。なおごく最近刊行の『社会科学の方法』（岩波新書）には同名の論文のほかにその周辺を扱った三論文を含んでおり、当該の課題にとってきわめて興味ぶかい。